法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<法政今昔>法政”予科”教授の面面

小田切, 秀雄 / オダギリ, ヒデオ / ODAGIRI, Hideo

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
59
(開始ページ / Start Page)
78
(終了ページ / End Page)
79
(発行年 / Year)
1999-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020045

法政〝予科〟教授の面面

小田切秀雄

学生運動で捕らえられ起訴猶予で出てきて、それまでいた学校（旧制の府立高校＝現在の都立大）をクビになり、二年ほど自宅でほとぼりをさましてから、法政大学予科の秋の編入試験を受けた。一九三五年当時としてもっとましな学校でなく、なぜ法政を受けたのか、合格、入学の経過に何があったのか、などについては、『私の見た昭和の思想と文学の五十年』（集英社版。上巻のほう）等にくわしく書いておいたので、ここではくりかえさない。

それより、〝予科〟などという聞きなれないことばについていうと、当時は国公立だけだった旧制高校に相当する予科という制度が、私大の一貫教育の最初のところに置かれていて、旧制中学五年出身者は予科第二部二年間、旧制四年出身者は予科第一部三年間の課程に入った。わたしは府立高校で中等部四年をすますとただちに旧制高校一年になっていたのだが、その年の秋にクビになったので、四年出身という資格にしかならず、予科第一部で三年間も学ばねばならぬことになった。そこで、編入試験を受けることによって半年分を救ったのだった。

予科の学生時代をいま考えて見ると、戦後の教養部がややそれに近いと思われる。一九四一年に文学部を卒業しているから、戦後にできた教養部を学生として体験したわけではないが。予科の教師にはいろいろなひとがいて、国文科志望のわたしたちは御巫（みかなぎ）清勇、境野正、小山龍之輔の講義を聴き、大田悌蔵に作文を課せられ、阿藤泊海の漢文の授業を受けた。英語は為光直経と佐藤緑葉だった。御巫は名前通りの神道系の学者だったが、法政では国文教科書のたんたんたる解読に終始し、境野もそれに近かったが、小山は『文芸鑑賞言論』ふうの著もあり、そのすこし前までの文学部日本文学科の中心だったひとで、近藤忠義が入ってきて日本文学科の性質が変ったのだった。しかし予科では小山がまだ講義をしていて、その作品鑑賞ぶりは、学生のわたしから見ても西尾実の『現代文学作品鑑賞』（岩波講座のちょうどそのころ出た第一次『日本文学』中の一冊。鷗外作品論だった）にくらべてさえ、作品のとらえ方がはるかにのんびりしているように見えた。

大田悌蔵はのちに最初の教養部長になったひとで、つねづね東洋倫理をふりかざしていたので、あるときの「作文」

に、東洋倫理の論理を問う、というふうな文をわたしは書き、まず東洋の範囲を限定し、それが東洋諸国諸時代とどういう関係にあるかを明らかにすることからはじめよ、また、もし東洋倫理が西洋倫理と対立するというなら、どこがどのように対立するかを歴史的、具体的、論理的に明らかにせよ、等のことが必要だ、と主張した。大田はうんざりしたような顔つきで、こういう考え方もあり得る、と八〇点をつけてくれた。

漢文の阿藤は、身なりからして落魄した昔の中国知識人といった感じのひとで、漢詩を読むときに、眼を細め自分のために朗詠する、というに近い読み方で読むのが印象的だった。偉い学者だったらしいのだが。英語の教師だった佐藤緑葉は、教室に入ってくるとまずゆっくりとテキストを読み、それをたんたんと訳して、時間がくるまでそれを続ける、それだけのことだった。学生にわかるかどうかなどという心配はもうやめた、という感じで、わたしはそれはそれなりにすじが通っている、とも考えていた。なおわたしは、かれが大正期の小説家だったことをなんとなく知っていた。何かの拍子にそれが出てこないかと思っていたが、ついにそういうことはなかった。かれが『近代思想』誌の有力な寄稿家で、すぐれた反戦文学の翻訳を同誌に出していたことなど知っていれば、かれをつかまえていろいろと問いただしたり、かれの家を訪れたりしたはずだったのだが。

予科のわたしのクラス担任は、おとなしい経済学者の多田基で、べつの教室に出ていた本多顕彰に会いに行けというので訪ね、いらい亡くなるまで本多からはずいぶん親切にされた。多田は内田百間の会（まあだ会）の事務局長をずっとつとめてきたというようなひとで、夫人はソプラノ歌手だった。

――すべてこれらのことを、わたしは毎週二回東横線の木月校舎をぬけ出して市ヶ谷の本校の片岡良一の講義を聴き、すぐに木月にとってかえすという暮しをしながら体験し、前掲の回想書に書いたようなことをふくめて、わたしは一九三六年三月無事一年次を終った。

（おだぎり　ひでお・文学部名誉教授）

編集部より……法政大学日本文学科の輝かしい往事を再現すべく、ここにコラム「法政今昔」を新設いたしました。第一走者を名誉教授小田切秀雄先生とし、以下リレー、年代順に会員諸兄姉から走っていただきます。